

百人一首新抄

外五〇

10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3



百人一首

天智天皇

蘇我領多吉

秋の園のうらみ

の巻乃

秋の園のうらみ 蘇我領多吉の巻乃

らム 蘇我領多吉の巻乃 蘇我領多吉の巻乃

香の玉の玉根の香瓜のすうわくさばわくわく

る代中にあつてをうたつ目まのたまのあふゆふをうたつ

アウキとてをうたつてはうらみんじやう

百人一首



持統天皇

皇極經世一

春すきて夏ふんじの白くの

秋の白くの

冬の白くの

春の白くの

夏の白くの

秋の白くの

冬の白くの

春の白くの

夏の白くの

柿本人丸

拾遺集一

山崎八景の

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの

あつりたるの



今ももたはちかたをいふまをいふまを
原の無きもいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを

安徳仲春

船今とあひさして月をいふまをいふまを
世すいふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを

いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを

いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを

いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを
いふまをいふまをいふまをいふまを



其のまゝに心身をたゞたてて、（念う）てそのアノまぢり

左撰法師 惟徳歌 一の辰

と云、（念う）都のまじり、（念う）都のまじり、（念う）都のまじり、（念う）都のまじり、（念う）都のまじり、

女を、（念う）死山とて、（念う）死山とて、（念う）死山とて、（念う）死山とて、（念う）死山とて、

とて、（念う）死山のまじり、（念う）死山のまじり、（念う）死山のまじり、（念う）死山のまじり、（念う）死山のまじり、

の中、（念う）何ともせず、（念う）何ともせず、（念う）何ともせず、（念う）何ともせず、（念う）何ともせず、

へかた、（念う）又て、（念う）又て、（念う）又て、（念う）又て、（念う）又て、（念う）又て、

て、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、

とて、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、（念う）女を、

小野小町 惟徳歌 一の辰

死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、

とて、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、（念う）死に、



大江守正 紫式部自の家の歌合八よる

月をこわくおすけりてはるかにとほのけりし月

一首のこ月をいへんこすともなひをたのむ

春家 藤原兼隆院の

世にいへば

あまの

錦織の

...

...

...

...

...

...

...

...

貞徳公 藤原季主院



五世本 乃其全子孫の事をして公田のわたりての事也
 かりぬきをかわけしとて、いふ事あり、かきせり
 に、世傳は、いふれ一巻せよとて

を、今半比とぬら、いふ事あり、心わく、世傳の事
 今一ふひ、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり
 一、日八、本のと、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり
 事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり
 せ、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり
 ぼ、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

中納言兼補

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

久松本切

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

い川

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

源宗千

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

山崎

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

もろ

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

九河内

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

心

いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり、いふ事あり

物おほくはあはれなき

物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき 物おほくはあはれなき

女生志事

女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事

女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事 女生志事

飯上是則

飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則

飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則

飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則 飯上是則

他及則

他及則 他及則 他及則 他及則 他及則 他及則 他及則 他及則 他及則 他及則



久しに
（注） 春に日未門にケク
（注） 一節のしずかふつふと
（注） 一節のしずかふつふと
（注） 一節のしずかふつふと

流原真風

歌謡一何

浪をうとあ久し女じ
（注） 一節のしずかふつふと
（注） 一節のしずかふつふと

化實之

縁物類

家よひ
（注） 一節のしずかふつふと
（注） 一節のしずかふつふと

人
（注） 一節のしずかふつふと
（注） 一節のしずかふつふと



らさしをほしめぬの存じしは道はちまむるの事と有
の事とすべしは、（一）

信原深委文

五月八日分りつらな松院

とよ

夏の花をよき言ふもゆめをよき言ふも、（一）
雲はいつくも思やうらん、（一）花をよき言ふも、（一）

かたし、松院あつた月、わたる、（一）有る、（一）せつ、（一）わ、（一）
とま、（一）つ、（一）た、（一）を、（一）す、（一）た、（一）ん、（一）と、（一）花、（一）の、（一）様、（一）す、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）
お、（一）の、（一）心、（一）の、（一）入、（一）り、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）

大屋朝来

松院深委文

とよ

つらな松院あつた月、わたる、（一）有る、（一）せつ、（一）わ、（一）
とま、（一）つ、（一）た、（一）を、（一）す、（一）た、（一）ん、（一）と、（一）花、（一）の、（一）様、（一）す、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）
お、（一）の、（一）心、（一）の、（一）入、（一）り、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）

つらな松院あつた月

わたる、（一）有る、（一）せつ、（一）わ、（一）

とよ

とま、（一）つ、（一）た、（一）を、（一）す、（一）た、（一）ん、（一）と、（一）花、（一）の、（一）様、（一）す、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）
お、（一）の、（一）心、（一）の、（一）入、（一）り、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）

右進

松院深委文

とよ

つらな松院あつた月、わたる、（一）有る、（一）せつ、（一）わ、（一）
とま、（一）つ、（一）た、（一）を、（一）す、（一）た、（一）ん、（一）と、（一）花、（一）の、（一）様、（一）す、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）
お、（一）の、（一）心、（一）の、（一）入、（一）り、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）

つらな松院あつた月、わたる、（一）有る、（一）せつ、（一）わ、（一）
とま、（一）つ、（一）た、（一）を、（一）す、（一）た、（一）ん、（一）と、（一）花、（一）の、（一）様、（一）す、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）
お、（一）の、（一）心、（一）の、（一）入、（一）り、（一）を、（一）言、（一）ふ、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）は、（一）い、（一）

松院深委文

とよ

とよ

徳を以て人の心を養ふの事一の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事二の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事三の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事四の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事五の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事六の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事七の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

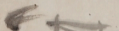
徳を以て人の心を養ふの事八の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事九の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十一の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十二の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也



徳を以て人の心を養ふの事十三の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十四の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十五の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十六の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十七の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十八の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事十九の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事二十の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事二十一の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事二十二の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也

徳を以て人の心を養ふの事二十三の心を養ふは徳を以て人の心を養ふ事也



かりんをきくを一をばとわたりて
かりんはあまのこゝろをさへりて
 かりんはあまのこゝろをさへりて
 かりんはあまのこゝろをさへりて

曾根守忠

影一の史

由ゆてつてはいへんといふはいふはいふ
ゆてつてはいへんといふはいふはいふ
 ゆてつてはいへんといふはいふはいふ
 ゆてつてはいへんといふはいふはいふ
 一人もあな
 一人もあな
 一人もあな

悪徳法師

悪徳法師

人くも伯方

八重藤
八重藤はあまのこゝろをさへりて
 八重藤はあまのこゝろをさへりて
 八重藤はあまのこゝろをさへりて
 一人もあな
 一人もあな
 一人もあな



いかまよふあはれをいふ事つとねえとてはたまらぬもの
 けふもあなをいふねとていふこともえさをいふ事つとらふ
 夜屋を借宿る あはれをいふ事つとねえとてはたまらぬもの
 又てはいふ事つとねえとてはたまらぬもの
 ぬれとていふ事つとねえとてはたまらぬもの
 かしこ明かりな夜 一日のさへあわれみかしてはたまらぬ
 としていふ事つとねえとてはたまらぬもの
 とねえとてはたまらぬもの
 右大徳道徳女 命入を借宿る
 月夜をいふ事つとねえとてはたまらぬもの

ていふ事つとねえとてはたまらぬもの
 かなつとねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの
 一日のさへあわれみかしてはたまらぬもの
 かわくつとねえとてはたまらぬもの
 のあつとねえとてはたまらぬもの
 俄爾二国女 命入を借宿る
 ねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの
 ねえとてはたまらぬもの



らふがれつひまをとりてわづらひて今日て今の世に
はたてたる一すもふかねし一ををまこころをまはし
大納言公任 敏徳公の大意をまはしりて人
歌よと侍々にも侍々

此の世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此

和泉公任 敏徳公の大意をまはしりて人
歌よと侍々にも侍々

わづらひつゝのうた

わづらひつゝのうた 此世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此

世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此

世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此

世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此
世にわづらひて入りかたりぬらふとて入るる此



わたりし御あひてみしやまこと そのつらみまね
 まよふ雲 まよふ雲のうらみ まよふ雲のうらみ まよふ雲のうらみ まよふ雲のうらみ
 一節のまに御あひてみしやまこと そのつらみまね
 だんをいともしけりく そのつらみまね
 大威三位 大威三位のうらみ 大威三位のうらみ 大威三位のうらみ 大威三位のうらみ
 有馬山 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ
 十 十のうらみ 十のうらみ 十のうらみ 十のうらみ

赤深 赤深のうらみ 赤深のうらみ 赤深のうらみ 赤深のうらみ
 有馬山 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ 有馬山のうらみ
 十 十のうらみ 十のうらみ 十のうらみ 十のうらみ



小太郎傳

今更和東武の神し保也たふさけし

して強流丹かたやま北もたつるのなおくに可命のわ
とるま小太郎傳有ことごともしてす命の
ゆたると平内女いづれはを候しは神すまうて
さく可いいしまの分のお丹庭に
人のつらんだんや を命に相助けたらんといふ
たつたらばはつつしまうて本とをおきにつくら
洋いましんとんにおきなしましたらばはしらせしましたらば
てまなるといふがてしよ

天のいまりのたらしめるたらしめるたらしめるたらしめる

みもん成り してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる
外の事はといふが してはしらせるたらしめるたらしめる

小太郎傳 してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる

伊勢大捕 してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる

なるとしてはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる

可いいましましならば してはしらせるたらしめるたらしめる

いいましましならばは してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる
あらわらせられる してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる
あらわらせられる してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる
あらわらせられる してはしらせるたらしめるたらしめる してはしらせるたらしめるたらしめる

一箇のまにのたつたらしめるたらしめる

一箇のまにの



集て大僧をもくろむて人をもくろむを啓ん

法以相告

法苑珠林の成物法をいひて

法苑珠林の成物法をいひて... 法苑珠林の成物法をいひて... 法苑珠林の成物法をいひて... 法苑珠林の成物法をいひて... 法苑珠林の成物法をいひて...

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

法とてんわもきては、（神代卷）人あはるるなり
 月あふ人あふ一情なり、（神代卷）一有るは、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり

月陽内信 （神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり

年の長し、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり

三條院 （神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり
（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり、（神代卷）人あはるるなり



一 かのかまじりなすてかゝつたて月とほらなふらふもしあふ
 けはゆほをとりをうけくはすもなほらうらふすなれおれ
 へ向とて一 月れいとんへりて三十一日て春をせりつて
 徳園は所 徳園 水木田平田長可念らんか
 わりし吹みむろばのより家世五田の門の許す
 一 目的のこゝに岩山は岩まわりの光りてを木五田向ま
 かくれしとていへん

良運法師 良運法師 歌一巻

はひいこまぬとまかてかむむていけとて同じ味の言葉
 一 目的のこゝに岩山は岩まわりの光りてを木五田向ま
 かくれしとていへん

大納言経信 大納言経信 歌一巻

大納言経信 大納言経信 歌一巻

大納言経信 大納言経信 歌一巻

大納言経信 大納言経信 歌一巻



のわりの殿いづみにすまはせしめたりやいづみをひらきしめたりや

とて世でん後あはれしくしいづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

松平内右衛門 経達いづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

て人くいづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

おのの毛上いづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

とて世でん後あはれしくしいづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

源後頼朝いづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

舟よいづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

やれいづみをひらきしめたりやいづみをひらきしめたりや

てしつらうして昔より女末よりわくむむむと

一首の末に今も昔も人の世はなるもとをいふ

源兼光 金吾 国森かちしんお事とあり

らくんわたりはうとふかをわかくもよく

九京入大願 幼と志願院は信をすもり

侍賢の流錦川 百をすもり

おろしむいんもあつ

賢のみふい

たり

後徳太子

得た

日分



道周法師 誦經一巻

おのゝみひらくもひききおわりのあつたに
いふねの徳をなすことなり 一巻の徳をなす
ことなり

皇太后宮太妃成 御述懐百首の書とあり
瓜門は春のしくさてある

世の中よまはるるはつらしくもかたし
ひりひり 世の中よまはるるはつらしくもかたし
なしくなり 一巻の徳をなすことなり

なしくなり 一巻の徳をなすことなり

瓜門は春のしくさてある

度原法師功名 御述懐一巻

なしくなり 一巻の徳をなすことなり

なしくなり 一巻の徳をなすことなり

夜も涼しくおのゝみひらくもひききおわりのあつたに



心

一箇のこゝろに

人々の心をなげきしつゝとてなりて 一箇のこゝろに

西行法師 妹月を恋ひ入る心より

今も七月や 想とれりもす 月夜にすてえの

心はつらふに かなるも かならず かならず

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

寂蓮法師 一箇のこゝろに

寂蓮法師 一箇のこゝろに

村女の暮も 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

一箇のこゝろに 一箇のこゝろに

式子内親王 一箇のこゝろに

式子内親王 一箇のこゝろに



我佛は汝干まんとぬ神の宿の地とて日(に)人
こりちしね神(かみ)はこりちしねこりちしねはくくもか一一百の
と我佛は汝干まんとぬ神の宿とてほくくものひうすれ
人人(ひと)をこりちしねとてほくく

源合右大男 野田領也

此のすく常とてともか世の中(よ)の事(こと)はまかぢても常(とこ)も
大く卷の小伝の代々もか一も代々(よ)の事(こと)はまかぢても一
とほくくの中世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中
わま一世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中
いとほくくの中世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中

世中(よ)の事(こと)はまかぢても常(とこ)も
とほくくの中世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中
よつてほくくの中世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中
いとほくくの中世の中(よ)の事(こと)はまかぢてもとてほくくの中

森藤雅也 朝日本林被流のり

たりと山山(やま)の峰(ね)のりのりたる山(やま)の峰(ね)のりたる
ありと山山(やま)の峰(ね)のりのりたる山(やま)の峰(ね)のりたる
ありと山山(やま)の峰(ね)のりのりたる山(やま)の峰(ね)のりたる
ありと山山(やま)の峰(ね)のりのりたる山(やま)の峰(ね)のりたる
ありと山山(やま)の峰(ね)のりのりたる山(やま)の峰(ね)のりたる

そのりみかすし

後鳥羽院 後鳥羽院一らせ

人もをくし 人くし 人くし 人くし わし 人くし

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

くさ あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

くさ あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

くさ あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

頼念院 頼念院一らせ

百人一首抄

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

くさ あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

くさ あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

あらしかく あらしかく 世て あらしかく 心不 あらしかく

百人一首抄

百人一首抄

神田綴平
英平吉
須原屋文助
石原屋文助
享和四年甲子正月
文化四年丁卯九月

享和四年甲子正月上木
文化四年丁卯九月發行
江戸石原氏藏板

發行書林

湯島天神下
須原屋文助
神田綴平
北島長四郎
神田鍋丁
英平吉

